

目次

はじめに	2
史料一、『東奥紀行』 「勿来」は長久保赤水の創作造語だった	3
史料二、『奥州名所図会』 <small>宮城県利府町説の依書</small> 八幡宮祠官の偽書だった	5
史料三、『太平記大全』 「名古曾関」の位置が明確に出ている	10
史料四、京都から「はつかあまり」 万葉の歌が位置を証明	11
資料、関連略年表メモ	12

❖ はじめに ❖

今般、私たちは、勿来が生んだ偉大な史家、佐藤一先生の『勿来関と源義家』の復刻本の出版にとりかかりました。

その中で、平成二十年五月いわき民報の『勿来関は 宮城県利府町にあった』という衝撃的な文字が目に入ってきました。調べてみると、いわき地域学会のメンバーによるもので、類似の論評は、小冊子などに載っていました。が、チラシを配布して大勢の市民に、勿来の関は実は宮城県利府町にあって、政治を顧みない平藩主が勝手に現在地に関明神を設置し、関趾にしてしまったのだと流布したのです。

利府町行って説明を受けたいわき市民もいて、近くに多賀城府もあり、考古学的にも立派なものが出土し、勿来川もあるので間違いないと思わされたそうです。

以来残念だったが、勿来関の話は、タブーだったと吐露された方もおります。

近年では、図書館に行っても、勿来の関に行っても、支所に行っても、勿来関はこころではなかったそうです。話しかけられ、驚くばかりです。又、インターネットで「勿来関」を検索すると「最近では菊田の関と勿来関は別の物」となっています。又、いわきの著名な方に勇気づけられて、名古屋関は利府町にあるとの本まで出版した利府の方もいます。このままでは、いわきの勿来関はなくなってしまう。

いわき市から給料をいただいて、「勿来」に関係する所で働いている方々ほとんどが、「本当の勿来関は宮城」だと、耳にしているようです。駅の名に始まり、町の名になり、学校や会社、インターチェンジの名にもなっています。

それが宮城が本物で、いわきは偽物だったとは何ということでしょう。ところが今回、図らずも四つの史料によって、勿来関はやはり、いわきの地だったことが明らかになりました。

私たちは、歴史の専門家でもなく、皆さんを感動させるような文章を書く才能もありません。しかし、真実を見る目と、地域を愛する情熱だけは誰にも負けないつもりです。

この示す四つの史料は、佐藤一先生の復刻版に添付する、利府町説に対する反論の史料収集の中で、見つけたものを要約したものです。が、先生の後押しを感じずにはおれません。又長久保赤水の縁者で、赤水顕彰会顧問の長久保片雲様には、多くの心温まる御助力をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

これで、菊田(多)の関イコール勿来関だったことを証明できたつもりです。

次は、これをたたき台として、地元若き学生諸君の奮起を願うものです。

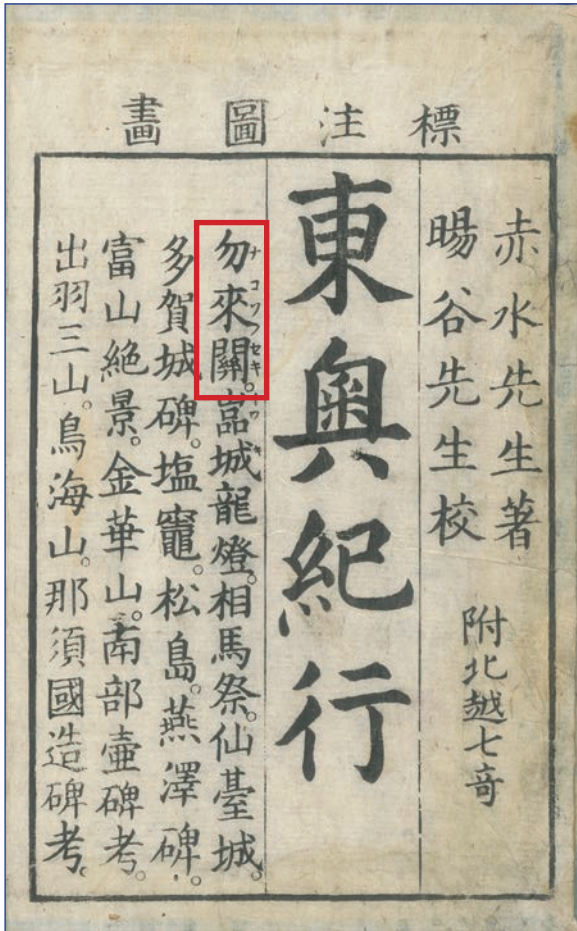
又、皆様が多くの方に「やはり勿来関は、ここだったのだ」と胸を張って堂々と訴えて言ってくれたら幸いです。

二〇二〇年十月十二日 白鷺池の玄正庵にて 橋本・菅波

史料一、『東奥紀行』

「勿来」は長久保赤水の創作造語だった

一七九二年、「勿来」の初見になります。長久保赤水顕彰会顧問の長久保片雲氏によれば、「とうおくきこう」と読むとのこと。本年（二〇二〇）、赤水関係資料が、本書も含め国の重要文化財になりました。この著の中に、「勿来」の文字は、赤水の創作造語だった証が残っていました。



(玄正庵所蔵)

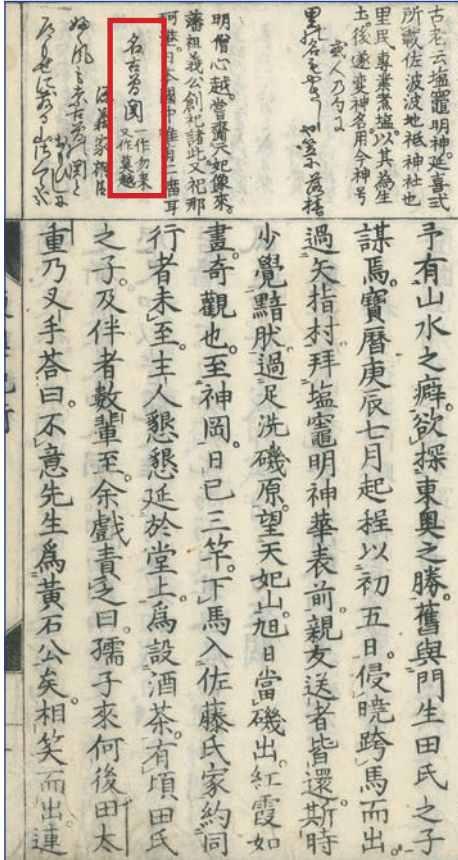
とうおく
『東奥紀行』

「勿来」は長久保赤水の創作造語だった

編纂と頭注は、甥の中行ちゅうかうによります。「一作、又作」は長久保赤水が工夫して古曾を「勿来、莫越」にしたことを示しています。赤水研究の第一人者で赤水の縁者でもある、長久保片雲氏の認可も得ることができました。

これによって「勿来関」の文字は、赤水がいわきの名古曾関に付けた創作造語だったことが明らかになりました。

疑問だった「蝦夷えみしよ来る勿れ」や万葉歌などの漢字の「勿来」を使った表記や他県での「勿来関」説など、見直しの必要があります。「内藤平藩主が、関趾を勝手に比定した」という風聞が、間違いであることは明確です。



(玄正庵所蔵)

史料二、『奥州名所図会』

① 八幡宮祠官の偽書だった

『前太平記』寛治四年三月二十九日、源義光朝臣、奥州の国府に著き給ふ。兼ては今明(けふあす)の程には、出羽に発向有るべしとして、軍立(いくさだち)する事隙なかりけるに、俄かに兵衛殿の downward となり、と云ひ旬(の)のしる。將軍聞き給ひ、あな不審(いぶかし)し。何としてか下り給ひぬるやらん、と嬉しさに先立ちて、大いに驚き給ひ、急ぎ対面あり。不思議の御下向、最覚束(いとおぼつか)なくこそ侍れ、と宣へければ、義光居寄り給へて、久しく見奉らず。遙かに合戦(かせん)の告(つげ)を承り、余りに心ならず候し程に、公(おほやけ)にも院にも、身の暇を申すといへども、勅面もなかりければ、自ら官を辞して、借(ひそ)かに下向仕りぬと申されければ、將軍悦びの涙をおさへ、義家を救はんと、遙々の下向祝着の程詞には尽すまじくこそ侍れ。今日足下の来り給へるは、併(し)かしながら、故入道殿の蘇りて坐(おは)したるとこそ覚え侍れ。和君(わきみ) 副將軍と成り給はば、武衡・家衡(たけひら・いへひら)が首を得ん事掌(てのうち)に有りとして、悦び勇み給ふ事諭ふべき者なし。將軍は去年(こぞ)よりの軍(いくさ)に次第を語り給へば、義光は帝都の形勢(ありさま)、来方(こしかた)の事とも宜ひ出でて、かつ喜び、かつかなしび、御物語数廻にぞ及びける。下略 同上 かかりける所に、家衡・武衡は数万騎を卒(ひい)て、金沢棚(かなざのはのさく)を打立ちしと訴ふる者あり。將軍聞き給ひ、去ぬる九ヶ年の戦ひに、貞任(さだとう)等鎮守を攻めんせし時、敵失謀天福(てんぷく)將軍也、武則真人(たけのりまこと)が賀しけるも、今この時に同じ。敵の滅亡速きにあらずと、驪(やが)て諸軍の半分を定め、府中に敵を入れ立てじとぞ防がせらる。左兵衛尉義光朝臣は七千余騎にて、城より一里打つて出で、奥道を支へらる。これ今の総関(そうのせき) 通奥海道(おおくかいどう)、すなはち名古曾関なり。次郎義親は五千余騎にて追手の城戸(きど)を三十余丁打つて出で、上道に陣を取る。これ今の海道の西、奥の細道の辺なり。(後略)

(角川書店発行本を複製)

『奥州名所図会』は、仙台大崎八幡宮の祠官で俳人でもあった、大場雄淵(おほば)が文政年間(一八〇四～一八二九)に作った図会です。

江戸時代に活字翻刻されたものが宮城県図書館にあります。福島県立図書館には、昭和六十二年に角川書店発行の活版印刷本があります。

いわば当時の領内観光案内書ですが、他国と論争のあるものに関しては、紙数を使って、反論を展開しています。

この書の中に、上記の部分があります。「前太平記」とあるので、前太平記の原書を見ても、この箇所には名古曾関の文字はありません。又、総関はどこにも出てきません。この文章は、前太平記の名を使っていますが、筆者が意のままに創作したものです。原書の別の個所に源將軍の歌と奈古曾関が出ていますが、その中に「陸奥の奈古曾と申す所で詠んだ」旨はあっても、そこが「今の総関」だとは、出てきません。

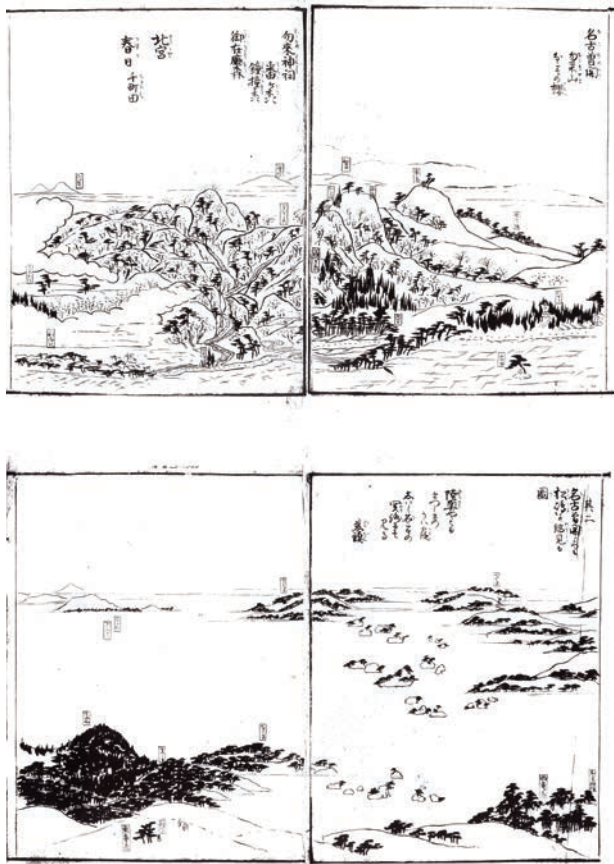
この書で歴史の真実を語るべきではないようです。

『奥州名所図会』

②

八幡宮祠官の偽書だった

ここにも「勿来」の文字を使っていますが、この書より少なくとも十二年前に、長久保赤水がいわきの関に創作したのが「勿来」です。いわきの著名な方たちも、この絵図を見て、利府町説を確信したのでしよう。



(宮城県図書館所蔵)

『奥州名所図会』

③

八幡宮祠官の偽書だった

『勿来神祠』の説明の部分

勿来神祠なごそのかみ 名古曾山の頂上みねのうへにあり。所祭まつるにや、久奈斗神くなのかみ。神書かみづきに曰く「伊弉諾尊いさなのみこと曰いひ、自みづか此莫過このかた、即投すて其杖そのつゑ。為な二岐神ふたつかみ。是来勿度神これくどのかみ以為を「関名せきな」者もの、事縁尚矣ことせきしやう」。千人引石せんにんひし一条の地いちじょうのちにして、勿来なごそになほ縁あり

(角川書店発行本を複製)

私訳

名古曾山の頂上にあり、祭るところは、久那斗の神である。神の書にいわく「伊弉諾尊曰く、これよりすぐるはなく、すなわちその杖を投げ、岐神となす。これ来勿度神の名を以て関の名となすは、縁尚のことかな。石一条の地にして、勿来になお縁がある。

利府の総の関が勿来関に変化していく三段論法です。神書の書き出しは、日本書紀を真似ていますが、書紀には「来勿度神」は出ていません。これも、筆者の創作文です。

「勿来」は、長久保赤水がいわきのなごその関に付けた創作造語です。元々は久奈斗神だったものを伊弉諾尊が杖を投げて岐神となり、これが来勿度神で関の名になったといい、だから「勿来」に縁しているのだといっているのです。この考えを画と共に描いたのが、利府町説の根拠となる『奥州名所図会』なのです。何の論理性もないではありませんか。

これからわかることは、元々利府町にあったのは、「なごそ」でも「名古曾」でもましてや「勿来」でもなく、久那斗神だったということです。

したがって、利府町では、「勿来」を「なごそ」や「名古曾」に戻すのではなく、「総関、総の川、久那土山、久那土神祠」などに戻すべきなのです。

近頃は立て看板まで「勿来」にしてしまっているのです。

この書の特にこの部分は、神の名を借りた虚言以外の何物でもありません。どんな神様が言ったのか、聞いてみたいものです。権威を笠に着た驕りです。

この書が、利府町に勿来関を記した最古（一八〇四〜一八二九）の文献です。

このような書を依書として、故郷のいわき勿来関を捨て、宮城の利府を勿来関とした、いわきの著名な方たちの猛省を詠えるものです。

別項で述べる『太平記大全』が板版本になったのが一六五九年です。そこには、「名古曾関打ち越えて岩城郡に至る」と名古曾関がいわきの現在地であることが明確に記されているのです。利府の図会の約百七十年も前の事です。

『奥州名所図会』④ 八幡宮祠官の偽書だった

長久保赤水の『東奥紀行』を引用している部分

『東奥紀行』

岩沼の駅に入る。仙台の臣古内主膳居所なり。およそ仙台提封の中十八城ありと。万石以上の臣分守す。これその一と云ふ。この日この駅の市にて交易雑踏、里民蟻の集まるが如く、喧熱甚だしく肩を摩て出づる。竹駒の祠を謁し、北行二百歩ばかり、民家の前に赤松あり。武隈松と云ひ、二木松と号く。木囲四、五尺あるべし。二楹となる。枝葉頗る禿ぐ。能因歌に抛らば、古松は已に枯れて後人ふたたび種ゑてその名を存す。これ過房子なり。すなはち過房子といへども楨幹古色、蓋し五百年外の物なり。

武隈松

赤水

似_レ辞_二大夫爵_一

遠在_二武隈東_一

縦不_二旧時物_一

相伝入_二国風_一

(角川書店発行本を複製)

著者が、長久保赤水の『東奥紀行』を読んでいた証拠です。

この他にもこの書に赤水の名は登場しています。

しかし、伊達藩に不都合な箇所では、「近世水戸の赤水と云うふ

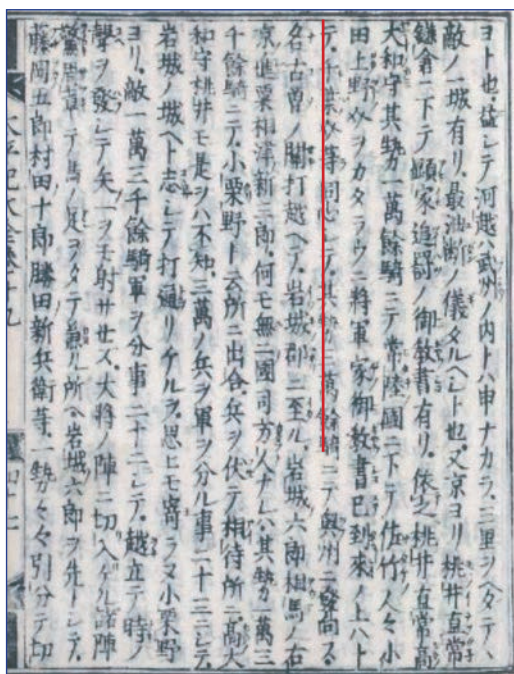
者……後世に惑を残す」と、酷評もしています。

著者の神官は、原書を改竄し、時に神の名を語り、目的のために

は人を落とす。他人の物を自分のものにする。知恵者であり相当の

作者だったと見えます。

史料三、『太平記大全』たいぜん「名古曾関」の位置が明確に出ていた



この板版出版は、一六五九年ですが、文はその二年前に完成したと言われています。

一三七〇年頃までにまとまった太平記を訳補充したものとわれています。内容は、室町期の軍記が中心です。江戸時代前から公にも、現関趾付近が名古曾の関だったことを類推させる重要な史料です。

『古今類聚常陸国誌』にこの史料部分が引用されていました。四千百ページを超える原本ですが、どうにか確認することができました。

「名古曾の関打ち越えて、岩城郡に至る」と明確に出っていました。

この書の出版は、内藤平藩主が現在地に比定する前です。さらに遡ること五十年前に詠まれた、九面の和歌も正史料として位置付けられる必要があります。

飛鳥井雅宣 一六〇九年頃

ここづらや しおみちくれば みちもなし

ここをなこそ の せきといふらん

一つの歌の中に「ここづら」(九面)と「なこそせき」が出てきます。「いふらん」からして、歌人が勝手になこそその関を九面に比定したのではないことが明らかです。

歌人は、一六〇九年頃、なこそせきが九面の近くにあったことを聞いていたことになりました。

利府説の拠り所とする資料は、これより約百七十年も後に作られたものです。

史料四、京都から「はつかあまり」万葉の歌が位置を証明

堀河百首（雑） 源師頼 一一〇五年頃―一一〇六年頃詠

たちわかれ はつかあまりに なりにけり けふやなこそ の せきをこゆらむ

私訳（京都を） 出立して二十日程経ちました。今日こそは、なこそその関を越えられるでしょう。

所要日数参考

一、愛知芸術文化センターレファレンス事例

「江戸時代に旅行した人は、一日何キロくらい歩いたのか。平均、一般的な数値でよいので知りたい」に対する回答

「一日約三十二キロメートルです。」

二、平藩主安藤信正公は嘉永二年六月二十七日に江戸を出立して七月三日に平に帰城している。（孫ひこたちへの炉端がたり）
長久保片雲著より）

三、平潟（勿来の隣）から京都まで千三十二里、平潟から東京と仙台まで各二百八十八里 一里は六百五十四メートル（平潟洞門碑・長久保赤水筆より）

四、西山宗因は、『奥州紀行』の中で平から松島まで六日掛かっていることを述べています。

五、『東奥紀行』で赤水は、勿来から仙台まで七日掛かっています。

六、明治十七年の道中旅日記によれば、窪田から京都まで少し寄り道をして二十三日掛かっています。（玄正庵所蔵、地図と道中日記より）

所見

先の和歌には、出発地名はありませんが、作者が都の役人なので京都と思われる。

これからすると、左表に示したように、京の都からいわきなこそまで、二十日では厳しく、もう一日は必要だったようので、和歌とピッタリ符号します。

この和歌は、なこそその関が陸奥の国の入口にあることを示す最古のもので、きわめて重要です。

源義家の「ふくかぜを」の歌は、心象風景に心を寄せて詠ったもので、解釈に個人差がありますが、この和歌はほかに解釈しようがないと思います。

これで利府町説は完全に否定されました!!

平均所要日数	里数	至	自
	赤水による		
21.1※1	1032	勿来~京都	
5.9※2	288	利府~勿来	

1里は0.654Km 32Km/日として
※1 1032 × 0.654/32 ※2 288 × 0.654/32

寛文七年	一六六七	水戸黄門、小宅生順に命じ『古今類聚常陸国誌』を完成させた。	いわき説論掇	古今類聚常陸国誌
天和二年	一六八二	藩主内藤義概が、関跡と定めた地に関明神を置く。		勿来地区地域史1
	一七一〇	第三代伊達藩主吉村が、領内に万葉の名所を索した。		
	一七一六			
享保四年	一七一九	第四代伊達藩主綱村、佐久間義和に奥羽観跡聞老志を作らせる。 「菊田郡」の項に「名古曾関」がある。	いわき説論掇	奥羽観跡聞老志
寛保四年	一七四一	伊達藩で封内名跡志を作成する。藩内に名古曾関は出てこない。	いわき説論掇	
安永年間	一七七二 一七八一	伊達藩で封内風土記を書き換えたが、「左右の関」を「惣の関」にしただけで、名古曾関は出てこない。	いわき説論掇	
寛政四年	一七九二	長久保赤水の『東奥紀行』が刊行する。名古曾を「工夫して「勿来」としたことが書かれていた。	いわき説論掇	東奥紀行
文政年間	一八〇四 一八二九	宮城の宮司、『奥州名所図会』を作り「奈古曾関」を載せ、源將軍の歌を「勿来関」と書く。	利府町説の依書	
文政五年	一八二二	舟山万年著『塩松勝譜』巻十に利府町の「奈古曾関」が紹介された。	利府町説の依書	
明治六年	一八九三	中山信名 修、栗田寛 補、『新編常陸国誌』完成する。ただし、版元は明治三二年に成る。	いわき説論掇	積善堂蔵版
明治二十年	一八九七	常磐線勿来駅開設		
明治三三年	一九〇〇	幸田露伴『うつしゑ』の中で、利府町説を「取るに足らざることいふべし」と記す。		

やはり、勿来関はいわきだった
「勿来関」真実の証明

発行日 2020年10月12日

著者 橋本吉治 菅波修一

発行者 勿来関研究会

勿来の関研究会

URL <https://nakosonosekikenkyukai.com>

Mail info@nakosonosekikenkyukai.com

印刷所 (有) 平電子印刷所
〒970-8024
福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地
TEL 0246-23-9051